

登場人物

沢井良生（谷茂の事務所に所属する弁護士。沢井和也の父）／街の声4
神田尚子（沢井和也の母）／街の声6
川上恵子（ジャーナリスト。神田尚子に関わる）／街の声5
荒木彰（編集者。川上恵子を担当する）／街の声2
谷 茂（ナガイワタルの主任弁護士）／街の声8
小山佳子（谷茂の事務所に所属する弁護士）／街の声3
松本雅人（喫茶店のマスター）／街の声7
志穂（谷茂の娘とされる。喫茶店でアルバイトをしている）／街の声1

舞台中央にカウンター、テーブルを並べて喫茶店の店内とする。店のエリアは場面に応じ切り取られて面会室になる。
店内を取り囲むように広いエリアがある。そこは店の外。街の声。出演者が役を離れて存在する楽屋にもなる。鏡があり、店の化粧室の鏡前も兼ねる。

1

店の中には松本。谷と沢井が入ってきた。（谷の手には写真週刊誌）

谷 なんだマスター。うちの子、もう帰っちゃってるの？

松本 ええ。学校あるからって。

谷 そんな時間だっけ。ちよっと早くない。

松本 このくらいにはいつも。……ご存じない？

谷 ……たまに来てみりゃ、これだわ。

沢井 お嬢さん年頃なんですよ。何かとありますよ。

谷 追い討ちかけるねえ沢井君。マスターの店だから安心してんのに。

松本 でも感心しますよ。……あの子から切り出したんですよ、学校について。

谷 無理矢理世話やくつてのも、どうも。だから嬉しいね。

松本 じゃ、お二人ともホットで。

沢井 あ、すみません。

谷 俺アメリカンでね。

松本 はいはい。

沢井 ……結構いらしてるんですよ。たまにとか言って。

谷 （窓の外を眺め）いいだろ、ここ。事務所も近いし眺めもまんざら悪くない。あつちが地裁だろ。土手の桜並木。川向こうが拘置所だから。

沢井 ……落ち着きますね。静かだし。

松本 閑古鳥は鳴きつぱなしですが。

沢井 いえ。そういう意味じゃ……。

谷 　どっこい混むよ。もうすぐ大きいが始まるから。
松本 　大きいのって……。
谷 　ウシオトコの初公判。二千人は並ぶんじゃない。
松本 　……ウシオトコ？
谷 　（指を角のように立て）ほら。件くだんって言われて騒がれた。
松本 　件……。てえと、見世物小屋か何か。
谷 　おいおい困るよ。老いぼれてもらっちゃ。
松本 　世情にはすつかり。（と、二人にコーヒーを出す）
谷 　全く。新聞もとつてないんだから。……商売っ気あんの？
沢井 　……。　（コーヒーに手をつけず外を眺めている）
谷 　……どうした沢井君。ガンジス川、何か浮かんでる？
沢井 　いえ別に。……すみません。
谷 　疲れきてるんじゃない。（と、写真週刊誌を広げる）
松本 　ガンジス川ですって？
沢井 　ウチの事務所じゃそう呼んでるんです。
松本 　洒落てますね。
谷 　洒落にしちや水、汚すぎだよ。遊覧船あるけど巡って嬉しいかね。
沢井 　本物をもっと汚いですよ。
松本 　何もかも洗い流してくれる川なんですよ。
沢井 　ええ。何もかも捨てるどころですから。
谷 　当分汚いだろね。新興国ってエコ後回しだろ。
松本 　行ったことあるんですか。
沢井 　興味なかったんですが、輪廻とか信じる奴がいて……。
松本 　ほう、巡礼の旅ですか。
谷 　あれ。……じゃ、あの後、尚子さんと？
沢井 　まさか新婚旅行の時ですよ、修習終えた後ですから。随分昔になりますね。
谷 　あの辺の偉い坊さんって、自分の前世を語るらしいけど、本当のところどうなんだろ
　　う。ドライブ・ラマみたいなのにはったり会ったら、理性は揺らぐかね。
沢井 　本当にすごい人って、表には出ないんですって。
谷 　インドの山奥で修行してるから？
沢井 　いえ。物乞いしてるから。
谷 　物乞い？
沢井 　路地なんかで乞食してる人。サドゥーって呼ばれる人たちなんです。
谷 　サドゥー？ どうすごいの。
沢井 　どうって。ふわって浮いたりするんじゃないですか。
谷 　何、ふわってって。信じてないでしょ、そういう系。
松本 　（外を眺め）沢山いますよね。サドゥー。
谷 　何言ってるの。
松本 　……橋の下に、掘っ建て小屋つくって。

沢井 ですね。公園にも。

谷 あゝ。路上つながりってこと？

松本 近頃めつきり。住んでいると自覚しますよ。

谷 沢井君、強制撤去、反対行ったりしてたっけ。

沢井 ボランティアで土にまみれた人、掘り起こしたりもしましたよ。まるで倒木のようにでした。まだ息してて……。

松本 勇気ありますね。

谷 正直、臭いっただらありやしないだろ。

沢井 でも僕はそういう人がある意味、この世界の矛盾を一身に背負っているような気がして。……神は自分の姿に見立てて人を作ったと言われてますが、ああいう人たちがまさにそうなんじゃないかって。……こんなこと言うとな変な目で見られますけど。

谷 ……彼は醜く、威厳もなく、ですか。

沢井 え？

谷 キリストっぽいこと言うね。確か学校ミッション系だっけ。

沢井 かじりましたけど、否定するために習ったようなものですよ。

松本 私には難しそうな話ですね……。

谷 じゃ、俺そろそろ事務所もどるわ。電話鳴りっぱなしだろ。小山さんあがる頃だし。

沢井 増えてきましたね。苦情も……。 (と、一気にコーヒーを飲もうと)

谷 あ。いいよ、いいよ。遅くなるから。

沢井 帰ってもあれですから。

谷 いや助かるけどね……。

沢井 正直、がつり組みたいです。他の先生方に連絡して今からでも。

谷 でも、沢井君は関与しちやいけないことだから。

沢井 ええ。

谷 利益相反だ。遺族は中立の立場になれんだろ。

沢井 もちろん。だから手伝う程度で……。

谷 サドウーじゃないよ、ナガイさんは……。我々の病を背負い、悲しみとなる存在じゃない。

沢井 わかってますよ。充分。

谷 ネットじゃ名無しが言いたい放題。週刊誌もウシオトコネタで絶好調だ。全く、実際に接見してみろってんだよ。……マスター、せめて新聞くらいとったら。アンテナ張らないとボケちゃうよ。(写真週刊誌をまるめて松本に渡す)

松本 (受け取り) ……ウシオトコですか。

遊覧船の汽笛が微かに響く。

谷 人権なんかありやしない。……世にも珍しい見世物小屋の始まりだ。

沢井 谷さんは、彼のことをどうお思いに。

谷 支えになろうと思ってるよ。もちろん同情じゃなく。心から寄り添おうと思ってる。

松本、谷から受け取った写真週刊誌をめくる。

店を取り囲むエリアで新聞に目を通す人。テレビを眺める人。パソコンや携帯電話でニュースを検索する人たちが見ている噂を口にする。

街の声 1 ある公判を世間が注目している。だが下される判決や法廷劇が目を引き訳ではない。二年前にナガイワタルという男が犯した凶悪な殺人事件ではあるのだが、それを獄中から予言し、的中させた死刑囚がいたという。その人物が一体誰なのか、依然、謎に包まれたままであるが、拘留所に携わる限られた人の中から噂が広まったとされている。

街の声 2 その死刑囚の予言はウェブ上で「ウシオトコの予言」と表記された。なぜウシオトコと呼ばれるに至ったかという点、未来の災難を予言する「件」という魔物が半牛半牛の姿をしていることに由来があるらしい。

街の声 3 一説によると、その死刑囚の顔は牛であるとか。

街の声 4 その逆で体が牛だとか。

街の声 5 或はどちらでもなく、死刑囚には人権がないと抗議する活動家による過激なパフォーマンスだとも噂された。

街の声 6 五月五日、五丁目のアーケードで一人が死ぬために五人が殺される。

街の声 1 当初は知る人ぞ知るこの予言であったが、時の農水大臣が視察中の牧場で……。

街の声 7 『ウシオトコなんていませんよ。』と、報道陣の前で情報通をアピール。

街の声 1 この珍発言が災いし、ウシオトコの予言は瞬く間に広まってしまふ。

街の声 8 大臣は軽率な発言を陳謝、法務大臣は会見を開きウシオトコの存在を完全否定。

街の声 1 ところが会見のあと、予言されたことものの日、予言通りの五丁目で、ナガイワタルという青年により、多くの尊い命が奪われた。

街の声 2 現行犯逮捕されたナガイは、ウシオトコの予言を聞いたことはあるが、まねて犯行に至ったのではなく……。

街の声 3 『死刑になりたかった。できるだけ多くの人を道連れにしたかった。』と供述。

街の声 4 この発言はウシオトコの予言通りとも解釈された。

街の声 1 つまり一人が死ぬために五人が殺されたのだ。

街の声 5 また、ウシオトコはこうも告げていた。

街の声 6 犯人は自分と同じ姿をし、世界を凍りつかせる言葉を吐くだろう。

街の声 1 人々はいずれナガイがウシオトコになりかわり予言を口にするのだろうと思つた。

街の声 7 ところが同じ姿と言われてもピンとこない。ナガイにはこれといった特徴がない。

街の声 8 元よりウシオトコの姿など誰も知らない。

街の声 1 マスコミはナガイが頑なにかぶり続けている帽子に着目。写真週刊誌はこぞつて帽子を脱いだ彼の頭部をグロテスクに合成し掲載したりした。

街の声 5 混乱する報道の最中、拘留所で三名の確定囚の死刑が執行された。

街の声 1 人々はその内の誰かがウシオトコだったのでと騒然としたが、何もはつきりとしたことはわからなかった。

街の声6 件という魔物は予言が当たった後、死んでしまうとされている。ウシオトコもその運命を辿ったのだろうか。

街の声7 執行を待たずに獄死する死刑囚も少なくはない。

街の声8 それから歳月がたち、ナガイによる連続殺傷事件の初公判が開かれることになった。

街の声1 世間は再びナガイがどのような姿で現れ、不謹慎にも新たなるウシオトコとしてどんな予言を告げるのか、成り行きを見つめはじめていた。

2

店の中には松本、川上。川上の手には新聞。

川上 (新聞を読み終えて) 良かった。じゃ、奥さんの調子もどったのね。

松本 おかげさまで。店にも出たがってるんですけどね。

川上 大人しくしてろって？

松本 ええ。しばらくガンジス川のほとりで。

川上 ガンジス川？

松本 (外を眺め) いやね。谷さんたちが仰っていて。なるほどねって。

川上 彼、顔出してんの……。

松本 お嬢さんに入ってもらおうようになってね。それで。

川上 お嬢さんって。その、谷さんの？

松本 ええ。しっかりした子で助かってますよ。何せ六十の手習いですから。

川上 初耳。そんな子いてたんだ。

松本 伏せてくれて言われてるんですがね。彼、大事件の弁護となると顔さすでしよ。

荒木、店に入ってくる。

荒木 どうしたんですか。

川上 ン。どうしたって、何が。

荒木 これはスクープですよ。川上さんが朝コーヒー飲んでるこの奇跡。

川上 朝飲みや朝コーヒーさ。何だ。

荒木 夜型のくせに無理しちゃって。大丈夫ですか？

川上 大丈夫もなにも。事務所で泊まっていたの。

荒木 え、出版祝いのその後に？

川上 そ、二人つきりで。

松本 まさか夜明けのコーヒーだったとは。

荒木 ……マスター、今どきそのフレーズで誰もピンときませんよ。

川上 (あくびをし) 神田さんと二人で二次会、三次会。カラオケでオールですよ。

荒木 あの、仲良くなるのもいいですがデリケートな時期っていうの、わかってもらってます？

川上 デリケートな時期って何さ。

荒木 川上さんが書かれた神田さんの本。初公判とばっちり合って世間の注目度、高いんですから。ウチの新刊にしては店頭平積み、どろんって時期ですよ。

川上 わざと公判にぶつけたんでしょ。取材始めて丸二年。出せるもんならいつでも出せたのに……。

荒木 まあ、まあ、まあ、まあ。

川上 それに公判前夜に出版パーティーって、どんな神経。

荒木 そこは神田さんの壮行会のノリも兼ねて。

川上 何だノリって。売れんもんだぞノンフィクション。とつとすみ追いやられるって。

荒木 ……って言うか、神田さんは一旦お戻りに？

志穂、あわただしく店に入ってくる。

志穂 ごめんなさい。遅れちゃった。

松本 おや、やっとお出ました。

荒木 あれ。君。雰囲気、変えた？

志穂 え。何にも。

荒木 うそうそ。その帽子。

志穂 これ？

荒木 うん。それ。

志穂 (帽子をくしゃつと脱ぎ) あ。いいかな。着替えすませたいんだけど。(と、手荷物片付ける)

荒木 ちよ、似合ってるのに。(川上に) ……恥じらい？

川上 知らんわ。

松本 あの子が、入ってもらってる……。

川上 え。……言ってたお嬢さん？

松本 ま。ここだけの話で。

荒木 何。ここだけの話って……。

松本 モーニングでいいんだよね。

荒木 あ。お願い。(写真週刊誌に気付き取る) ……つと、どうしたの、新しいフライデー。取り始めたの？ こういうの。

松本 新聞だけだよ。それは忘れ物。

志穂 (エプロンを手を持ち) マスター。お手洗い、お客さん？

松本 志穂ちゃん。着替えるの上の階、使って。

荒木 ……もしかして。神田さん？

川上 ごめんなさい。相当出てこないよ、気合い入れてるから。

志穂 いいです。いいです。

志穂、店から出る。

荒木 徹夜明けで初陣。高ぶってらっしゃるんですかね。

川上 まさか、ちゃっかり寝てたよ。

荒木 なんだ、寝れたんだ。

川上 寝れる人なの神田さん。どれだけ勝手に寝られたことか……。

荒木 それだけ明け透けな関係になられたということ。

川上 ま。年、近いし共通点あったけど。

荒木 偶然、俳句部だったとは。闘う俳句甲子園。

川上 あっちは弱小校よ。きつと競技中も考え込んで寝て負けたに違いない。危機的状况になると落ちるように眠るから。

荒木 冴えませんか。危機的状况になると、普通。

川上 離婚の相談受けた時も言うだけ言って。ちくしょうって……。見てみりや寝てた。

荒木 いい意味で凶太い。ある意味たくましい。

川上 私とは別世界に生きてるから。……春の朝 顔をあらって 塗りたくる。

荒木 ぐらいでなきや、保母さんなんて務まらないんですかね。

川上 小太鼓みたいに園児抱えるの見た。よっ、ぽんって。

荒木 でも複雑な思いされるんでしょうね。……同じ位のお子さん相手にしてるんですよ。

川上 踏み込むべきだったかな。そういうところ見せない強さは尊敬するね。

松本 (荒木にモーニングを出し) はい。トースト、甘くしといたよ。

荒木 ……ところで、昨夜、切り出せなかった話が一件ありまして。

川上 何かな、良い話じゃなさそうね。

荒木 神田さんの元旦那さんから長文が。

川上 さっそく抗議ですか。

荒木 抗議文ならまだわかるんですが。掲載を希望されてるコメントが……。

川上 どうして。もう出版されてるの知らないの？

荒木 承知の上での寄稿でしょうか。(原稿を出し) 相変わらずの論調で。……これ、神田さんにもお知らせしますか？

川上 (原稿を手に取り) いい気しないでしょ。

荒木 ……じゃ、こちらから詫びをいれる方向で。

川上 彼のことは慎重にね、格好のネタにされるから。

荒木 全く理解できませんよ。息子さんが被害に遭われたわけでしょ。当事者の身になったら考え変わると思うんですけど。いらっしやるそうじゃないですか、奥さんが被害に遭われてから思い直して被害者に寄り添うようになられた弁護士の方が。

川上 同席しようか、気難しい人だよ。

荒木 いえいえ。任せて下さい。

川上 まさか谷さんのお友達だったとはね。

荒木 ……川上さんこそ、面識あるんですね。谷茂と。

川上 腐れ縁ですよ。

荒木 死刑になりたいって五人も人を殺したんですよ。そんな人間、一体どう弁護するつもりなんです？

川上 なんだ荒木君、遅れてる。

荒木 遅れてるって、何が。

川上 弁護側の主張、変わったんだよ。ナガイワタルはウシオトコの予言に影響されて自己を喪失した被害者だって。

荒木 そんなこと言い出してるんですか。

川上 (写真週刊誌をひろげ) 弁護団代表、谷茂は新たななる精神鑑定を要求、ナガイの責任能力を争う姿勢である。

荒木 あの、『フライデー』だから読んでるだけじゃないですか。マスコミの端くれのプライド持ちましょうよ。

川上 今や話題、持ち切りですよ。(写真週刊誌を荒木に渡す)

荒木 作り話、見え見えじゃないですか。苦し紛れもいいところですよ。……見て下さいよ(写真週刊誌を広げ)これ。……ほんと、凶悪な面してますよね。

川上 あのね、それ、誰だかわかってる？

荒木 もちろん。……人権派弁護士、谷茂でしょ。

松本 ……そんな悪い写りようですか。

志穂 (エプロンをつけ戻ってくる) すみません。寝過ぎしちゃって。

松本 (荒木から写真週刊誌を奪い) ……いいの、いいの。慣れっこだから。

荒木 ……あ。川上さん。

川上 何。

荒木 ちっちゃい虫が。コップの中に。

川上 あらあら。(と、コップの中の虫を取り、両手に包む)

荒木 ……あ。いいです、川上さん。そんなの触らないで。

川上 そこ、のいて、のいて。(と、外に虫を放す)

松本 ……すみません。そっちの窓、開けっ放しにしてたから。

志穂 お持ちしますね、お水。

川上 いいですよ。おかまいなく。

荒木 いくらなんでも虫が浸かったの。

川上 君のご先祖だったかもしれないよ。……って、思ったらどうした？

荒木 ……そういった方面もお書きに？

川上 不思議方面は別に。……でも、どう思う。

荒木 (松本と目が合う) じゃ、おじいちゃんだったのかな。

松本 ……縁起でもない。

志穂 窓、閉めますね。エアコン入れますから。

川上 いいですよ。風、心地いいから。……香りますね。

松本 河川敷の公園でしょう。

志穂 咲き始めましたからね、桜。

神田、喪服姿でポーチと風呂敷に包んだ遺影を持ち入ってくる。

神田 あ。誰かお待たせした？ ごめん、長居して。

志穂 いえ。もうすませましたから。

荒木 ……ホントだ。気合い入ってる。(原稿を丸めて隠す)

川上 ピカピカの一年生のお出ました。

神田 ピカピカどころか、乾燥しまくりカピカピですよ。昨日飲み過ぎたね、ノリわるう。

川上 妄想すればホルモンのバランス良くなるらしいよ。

神田 川上さん妄想するの？ 金持ちイケメンの妄想。

川上 するか。弁護士の元ヨメに言われたないし。

神田 ぬあ。あ、あ。……声もしんどいわ。やったかも。

川上 歌い過ぎだよ、昭和歌謡。

荒木 もんたよしのり。葛木ユキ。

神田 も、画面って大きくなってるよね。

荒木 画面って？

神田 どの家庭もテレビの画面。「見た、見た、奥さん。人って不幸になると老けるね。」って、茶の間のおばはんの話。かなわんわ。大画面引き延ばしの刑だわ。

川上 映るからって、回重ねるごとに濃くなってるよ。スッピンでもそれなりに見えるって。

神田 いいよね。川上さん、てるんてるんで。

荒木 てるんてるんて？

神田 陽にちつとも当たらん職を生業とする。超夜型、色白妖怪「てるんてるん」

川上 わけがわからんし。

神田 ワイドショーって、テロップで年齢平気で出すけど、なんとかならんか。

川上 抜けりゃいいのよ遺族の会見。義務ってわけじゃないんでしょ。

神田 いやいや結構、影響力あるんだよ遺族会のパフォーマンス。私のぱつと見。若い判事ってね、閉廷後ささって控え室もどって公判の報道見るんだから。

川上 テレビで見たんでしょ。『判事の素顔』すぐ影響うけるんだから。

神田 (鏡を取り出し)……やだな。濃いゝか。

川上 ずっと前、お母さんにご挨拶したけどさ……。

神田 ン。母さんがどうした？

川上 (しみじみと)そこはかとなく似て来るもんだね。

神田 ……あんた、へこむことびゅんびゅん飛ばすね。盛り上げてよ、見られる戦場に向かう女兵士ですよ。(川上のコップに手を伸ばし)あ。これ、飲んじゃっていい？

荒木 あ、ダメです。これ。おじいちゃんの。

神田 え。おじいちゃん？

荒木 浸かっちゃってたんです。

神田 は。これに？

松本 いや、私がじゃなくて……。

志穂 かわりのお冷や、お持ちしますよ。(神田にお冷やを持っていく)

神田 ごめんなさい。薬飲めりや、なんでもいいんで。(薬のケースを出す)

荒木 大丈夫ですか？

神田 (錠剤を一つ一つ並べながら)……よく見る目。よく聞く耳。よく考える頭。よく働く手足。園児に叩き込んでんだい、有言実行。

川上 言ったでしよ。バタバタするから、帰ったらって。タクシー代ぐらい出したのに。

神田 これが飲まずにやっつけられるか。べらんめい。(薬を口にほおぼり一気に飲みほす)
川上 本音はそっちか。

神田 ……そうよ。極貧ジャーナリストさん。

荒木 実に明け透けな関係になられたということでは……。

神田 ホント赤裸々に書いたね。知りたいですか、タレントでもない中年女性の半生。

川上 一切嘘は書いてません。印税もきちんと支払いますから。

神田 売れるのかな。

川上 売れとるんだよ。

神田 なんだよね。実際、目立つちゃったね。……私、顔になっちゃったよ。

荒木 この調子で、第二弾、どどーんで行っちゃいますか。

神田 そんなネタ残ってるかな。

川上 ネタって言っちゃおしまいよ。

荒木 ご主人と別れた理由を小出しに暴露していく……。

神田 沢井君出すのはリスクじゃない？

川上 (荒木をひっぱたく) 黙っててよ。洒落にならないんだから。

神田 でも間違いない興味もたれるよね。どこ行っても、私、被害者、沢井和也の母なのに神田尚子と紹介されていますから。売れる本もそっちの名前で出てますから。

川上 大衆にも良心あるわよ。

神田 ……私、魂売ってないよね。

川上 そんな安いもんじゃないよ。

神田 微妙に距離感じることあるのね、皆と。神田さん顔だからって一番真ん中の席に座ることになったりして。嫌じゃないんだけど。なんか、すすすすするのね。

川上 いつも見てるよ。大画面引き延ばしの刑。

神田 見ると哀れね、見てみると。勝手に鼻水ずずず出るけど決して演技じゃないんだよ。でもあく映るんだ。

川上 テレビってお決まりの姿しか流さないから。

荒木 お茶の間の期待通りですからね。

神田 ……ところさ。まったく期待通りじゃないコメント受け取ったんだけど。

荒木 あ。お手紙ですか？ 感想なら我が社宛に……。

神田 送られてきたのね沢井君から。(プリントしたものを出し) つらつらと被害者遺族としてはあるまじき主張。こんなの載せろって何、嫌みですか。

荒木 お読みにになりましたか。

神田 ……一筆頼んでたんだ。連絡とってたんだ。

川上 彼のことまるきり避けて書いたわけじゃないんだから。夫婦だったのも事実だし。和也君の父親でもあるでしょ。

神田 読んだら疲れた。おかげで寝れた。(伸びをして、止まる)

川上 ……よけいなお世話でしたか。手記出しましょうって。――

神田 (顔をパチンと叩き) いやいや。……感謝してるよ。ホント思ってる。穴が開いたまま、ぼけっと成り行き見てるより心に推進力ついたよ。

荒木 止まると電池切れましますもんね。

神田 踏ん切りもついた。きっぱり別れることもできた。スターティング・オーヴァーだ。
川上 だったらいんだけど……。
神田 じゃ、そろそろ行くね。遺族会で作戦会議あるから。
川上 意見陳述するんだよね。柵の中に入って。
神田 初対面なんだから、ナガイワタルと。
荒木 やつと直接対決ですね。
神田 川上さん、この後どうするの。寝直す？ もう陽昇ってるけど。
川上 まさか並ぶよ。傍聴席の抽選、確率相当低いけど。荒木君につきあってもらうから。
荒木 くじ運悪いんですけど。マジで。
神田 (松本に) じゃ。ごちそうさま。
川上 いいよ。こっち持ちで。
神田 お。サンキュー。
松本 地裁に行かれるんですね。
神田 ええ。便利いいからまた来ますね。
川上 あ。ちよつと、信じられん。
神田 ん。何よ。
川上 ……和也君の写真。忘れてない？
神田 おつと。……いかん、いかん。

神田、風呂敷に包んだ遺影を抱きしめ店を出る。
志穂、店の新聞を手にして開く。

志穂 ナガイワタルは身柄を拘束されて以来、初めて人々の前に姿を現した。しかし法廷でのナガイは、反省の言葉はおろか終始、黙秘を貫いた。ナガイの態度は弁護団の作戦とみられている。

街の声2 主任弁護人の谷茂は、ナガイは言葉を口にすると、それが何処かで新たな悲劇を生み、さらには自分がウシオトコだと確定する妄想を持ってしまっていると主張。拘置所内での過度のストレスが引き起こした拘禁性の病の可能性があると示唆、新たな精神鑑定医の選定、裁判のやり直しを求めている。

街の声3 遺族は会見で不快感を露わにする。彼は犯行に自覚的であり、既に精神鑑定の結果も出ている。ナガイは自己愛性人格障害と診断され、責任能力は充分あったとされている。

3

店の中には松本、志穂。テーブルに沢井、小山、手に封筒を持ち入ってくる。

小山 珍しいですね。沢井先生が外で考え事って。
沢井 ここ落ち着くね。谷先生の隠れスポットだった？
小山 らしいですね。……はい。調書のコピー。

沢井 (封筒を受け取り) ありがとう。
小山 浮気ですか、先生。離婚の理由。
沢井 え。

小山 ……いえ、今されてる。

沢井 あ。調停ね。(封筒から調書を出し) いつから浮気してたかって話が争点でね。

小山 どっちが？

沢井 多分、旦那の方が先。

小山 旦那が先って。

沢井 どっちの言い分も聞くからね。

小山 いわゆるダブル不倫ですか。

沢井 もうお互い新しい相手と住んでたりするから。でも、どうも奥さんのご懐妊中、実家へ戻られたとき、旦那さんが別の……。

小山 浮気の王道。

沢井 ……何かにつけて旦那が不利なんだよね。

小山 因に、そのとき身籠っていたのは……。

沢井 そりゃ、旦那さんとの間による……。

小山 DNA鑑定させましょ。

沢井 じゃないって思うの？

小山 旦那は定期的に家あける人でしょ。奥さんも真つ直ぐ実家に戻られるような女ですかね。

沢井 小山さん、「家政婦は見た」入ってない？

小山 いやいや。ありえると思いますよ。

沢井 二人の言い分、微妙に食い違ってるんだよね。

小山 でも、こういうの担当してもらわないと。

沢井 別に嫌じゃないよ。仕事だもん。

小山 弁護士会から白羽の矢が立ったって、谷先生、ほとんど手弁当でしょ。

沢井 お金になる仕事しないとね。事務所回っていかないから。

小山 沢井先生のプライベートもいろいろおありでしょうけど……。

沢井 うん。それはそれだから。

小山 (調書を眺め) ……人間、家庭が基本ですからね。

沢井 あの、励ましてくれてるのかな。

荒木、鞆と皿を手に入ってくる。

荒木 あ。マスター、ごちそうさまでした。(と、皿を差し出す)

松本 どうしたの今時分。さぼりに来たの？

荒木 まさか。仕事、仕事。

志穂 いいのよ、出前のお皿。私、下げに行くから。

荒木 いや、いいんだって。

志穂 私も怠けてるみたいじゃない。(と、化粧室に向う)

荒木 ……散々だなあ。
松本 いつもの甘いのかい？
荒木 (沢井に気付き) ……いや、甘いをやめて、ホットで。(沢井を窺い) ……あ、これは先生。もういらしてるとは。
沢井 かまわないよ。事務所も近いし。ついだから。
荒木 この度は、何度もコメントをいただきまして。(鞆から神田の手記を取り出し) え、つと、こちらは元奥さんの手記でして……。
沢井 でも書いたの川上さんだよ。
荒木 ……もしやお読みになれました？
小山 これ平積みされてるの見ましたよ。
荒木 おかげさまで出足好調で……。
沢井 生真面目すぎたかな。俺のコメント。
小山 わ。先生も一言寄せたりしてるんですか？
沢井 いや、それがね……。
荒木 沢井先生にはウチの川上と連絡を取りつつ、ご熱心に推敲していただいたんですが、あくまでコンセプトにそぐわないということ。……ギリギリ、アウトって感じに。
小山 ギリギリでアウト？
沢井 あの、川上さんって、本当どういふ人なの。被害者に寄り添うのも間違いじゃないけどさ……。
荒木 谷先生とは面識あるようですが。
沢井 百歩譲って俺がおかしいとしても、書き方、一方的すぎない？
荒木そこは一冊の本としてのまとまりというか、元奥さんのポリシーもごさいますから。でも僕的には沢井さんの書かれた言葉には誠意を感じますし。……又の機会という感じで。

沢井 じゃ、続編みたいなの、出す感じなの。
荒木 ……それは上と掛け合ってみないとなんとも。でも、まずはまずですから。なんとか。
沢井 いいよ。手間だろ。
荒木 ですが、これには、ご家族の貴重な思い出も書かれていますから……。
沢井 それは神田さんの思い出だよ。
志穂 (化粧室から着替えて出てくる) マスター、今日は上がりますね。
松本 あ。そうだった、時間だね。
小山 (志穂に) あの。もう上がるの？ お父さん、来ると思うけど。
志穂 え……。
沢井 えつと。志穂ちゃんだよ。
荒木 お父さん？
松本 ああ。
志穂 ……そうですか。

志穂、帽子をかぶり店から出る。

松本 ……店混むとご機嫌斜めで。
沢井 地裁から人、流れてくるでしょ。
松本 祭りじゃないかってくらいの賑わいで。
荒木 (沢井に)では、ここは僕が……。
沢井 いいよ。ついでなんだから。
松本 荒木君、飲んでいかないの？
荒木 あ。……頼んでたっけ。

谷、店に入ってくる。

松本 いらつしやい。

荒木、谷を見ると思わず身を屈め、コーヒーを手に隅のテーブルに向う。

沢井 お疲れさまです。

小山 お嬢さん、今、上がられましたよ。

谷 機嫌悪いな。シカトくらったよ。

沢井 反抗期ですかね。

谷 ……マスター、アメリカンちようだい。

松本 (小山に)で。あなたは。いいの。

小山 じゃ、私もアメリカン。カフェイン補給しよつと。

谷 そうそう、小山さん。朝、銀行でおろしてくれて言ってたお金。

小山 先生の引き出しに。……ちよつと、不用心でしたか？

谷 いや。それもあるけど、三万円つて頼んでたでしょ。三百万入ってて焦ったんだけど。

小山 あ。道理で多いなうって。

沢井 頼むよ。任せてんだから、そういうの。

谷 ナガイさんにどんな差し入れすると思ってるの？

小山 ですね。私だったらウオウウオウのイエイエイですね。

谷 もう戻しといたから。

小山 どうもすみませんでした。

谷 (手記を見つ)……これ例の、尚子さんの本じゃない。

沢井 ええ。川上ってジャーナリストに書かせた。

小山 先生、面識あるんですね。……この本書かれた方と。

谷 ああ、検察やめたあと興味もたれてね、専門家気取りの厄介な方ですよ。

小山 手敵しい言いようですね。
谷 彼女、ポリシーないんだもん。このタイミングで被害者本出しゃいくらでも売れるでしよ。

小山 そうかもしれないけど……。

谷 食い物にされなきゃいいんだけど。二人、どうやって知り合ったの？

沢井 読んでたんですよ、ブログかなんかを。

谷 ……頼れるんだよな。身内よりもウェブ上の他人がき。
小山 でも、こういうのって。あってもいいと思いますよ。
谷 ちゃんと読んでから言ってるね。これ出てから嫌がらせの電話、うんと増えたんだよ。
松本 (コーヒーを出し) ……はい。アメリカンね。
沢井 ……元気そうでしたか？
谷 ん。
沢井 彼。口がきけないって。
谷 ああ。黙秘の練習してるわけじゃないんだけどね。
沢井 拘置所内の処遇が悪いか。
谷 帽子を差し入れて、俺もかぶって相手すると、落ち着くみたい。でも、口は開かない。
小山 演技じゃないんですか？
谷 演技って？
小山 ウシオトコになるのが怖いなんて。だから黙ってるって。世論は黙っていませんよ。
谷 本心に脅えてるんだよ。
松本 ナガイワタルの話ですか。
谷 作り話なんかじゃないですよ。ほんと。
小山 ……先生、もしかしてノストラダムスとか信じる方でした？
谷 ノストラダムス？
小山 ええ。一九九九年、人類が減びるっていわれた。
谷 あゝ、俺は信じてたね。ここだけの話。
沢井 マジですか。
谷 一九九九年で世界が終わってもいい人生プラン立ててたから。就活もしなかったし。
小山 絶対黙ってた方がいいですよ。
谷 だからここだけの話って。
小山 その意気込みで検察官採用された過去あるなんて。
沢井 よかったですね。頭よくて。
小山 出来すぎるとまたややこしい。ウシオトコの予言も信じてたんでしょ。
沢井 でも小山さんも、おまじないとか言って東向いてプリン食べたりするじゃない。
小山 規模が違いすぎますよ。ウシオトコの予言を彼の行動に当てはめるなんて……。
谷 彼の中じゃ事実なんだって。
小山 じゃ、するんですか。予言って。それを聞いてしまったら、どうしようもなくなつてしまうような言葉を彼は口にするんですかね。
沢井 そんなこと突き止めてるんじゃないでしょ。
谷 大体、責任能力が有無の精神鑑定だけを要求してるんじゃないんだよ。……まともに裁判を理解できているのかどうか、それさえ判らないんだ。
小山 会見開いて説明すればいいじゃないですか。
谷 好き勝手書かれるだけ。
小山 欧米では弁護士がメディアに出て訴えると裁判が有利に運んだり、罪が軽くなったりしますよね。
谷 それ、司法としてどうよ。

小山 ……先生、顔、怖いから。

谷 関係ない！ 写真の写り。

小山 仕事減りそう。KY弁護士。叩かれてるの、ご存知でしょ。

谷 KYで充分。気を利かせてどうするの。死刑を前提にした裁判が、裁判所と検察の間でサクサク進行されるだけだよ。いいの。世論なんて、笑わせときゃ。

小山 書かれてますよ。ウツシッシッて。

谷 そ。ウツシッシッですよ。

松本 大橋巨泉ですか。

谷 そ。大橋巨泉ですよ。

沢井 ……あの。いいんですかね。聞かれちゃって。

谷 (荒木に気付き) マスターは、わきまえてる人だけ……。

荒木 (視線を感じ) ……おっと、お呼びでない。

小山 あ……。

荒木、そそくさと店から出て行く。

谷 誰。今の。

沢井 出版社の方ですよ。この本、担当されてる。

谷 なんだ。言つてよ、マスター。内情聞かれちゃったじゃない。

松本 取りつく島がなくて。面目ない。

小山 悪口も聞かれましたよ。川上さんの。

谷 じゃあ、彼女も店、来てたりするのかな。

松本 ……まあ便利いいですからね。あちらに渡られるには。

谷 そっか。(ガンジス川を眺める) だよね。 ……桜も見頃だしね。

沢井 ……面会には、誰も来ないんですか？

谷 ま、両親は勘当してるからね。幸いにして、検察から圧力かけられる家族はいないわけだが身元引受人が誰一人いない。俺がなれないことないけど。

小山 厳しいですよ。娘さんにもなつかれないのに。

沢井 法廷で彼は、本当に何も。

谷 ……裁判来ればいいよ、沢井君も。

沢井 僕がですか。

谷 被害者遺族なんだよ。傍聴もできるし、場合によっては意見陳述できる。

小山 意見陳述って弁護と逆ですよ。どんな目に遭ったか述べることでしょ。

谷 来なきや判んないよ。公判中、彼はずっと罵声浴びせられてるんだ。でも、一切そういうところは報道されない。

小山 被害者を悪くは流せないでしょ。

谷 加害者は悪人じゃないといけないの？ 誰のために。

小山 でも、これは明らかに被告が悪くて、凶悪な犯罪ですよ。

谷 会つてごらん、普通の人だから。

小山 全国から無報酬で集まる先生方は偉いと思いますし、理解しようと思つてますけど。

谷 どうしたの。

小山 ……肩入れする気持ち、正直、わかりません。

谷 いいかい。彼が絶対不可避な境遇で生まれた人間で、家庭環境、クラスメート、嫌な先輩、正規雇用されなくて。どう選択しようかと不幸しか選べなかったとしたらどうだろう。

小山 先生にしては甘い論調。そんなこといい出したら、犯罪そのものを全部、仕方がないから認めましょうってことになりませんか？

谷 彼はね、弱い人なんだ。

小山 殺せない人っていますよね。どんなに不幸でも我慢して生き抜く人もいますよね。

谷 それは強い人なんだよ。信頼できる友達が持っていて、不幸でもその状況を回避できる能力がある人なんだ。小山さんだってそうじゃない。

小山 がんばってますから、私。

谷 ……がんばれる。それ強さだよ。恋愛はイマイチだったかもしれないよ。でも、そのエネルギーを勉学に費やし、国立大に現役合格。ところが国立の女子は地味ときた。異性に疎遠のキャンパス・ライフ。でも君はその抑圧さえもプラスにフル活用して、司法修習に三十路スレスレで合格したんじゃない。順風満帆。君はね、強い人なんだ。

小山 先生に居酒屋で心開くの、やめますね。

谷 理解しようよ。彼のこと。

小山 被害者はどちらですか。

谷 もちろん弱い人だよ。救われるべきだ。

小山 唐突ですよ。不可避で理不尽ですよ。

谷 ……何。考え方、変わったの？

小山 死刑はどうかと思ってますよ。けれど、場合によってはありますよ。

谷 小山さん、それは必要ってことになるよね。

小山 場合によってです。予防線として。つまり。

谷 それって、ありなんだよ。

小山 ギリギリのラインで……。

谷 同じだって。

小山 そうです。私は必要だと思ってますよ。死刑を。

谷 ……うん。いいんだ。責めないよ。国民の八割以上は君と同じ考えなんだから。

小山 嫌な言い方しますね。

谷 嫌なのは、何故？ 違うの。どうしてだろう。

小山 ……私、事務所戻りますね。

沢井 いいんじゃないの？ もう上がっちゃって。

小山 失礼します。

小山、店から去る。

谷 ……腹割って話していいこうよ。いいんだって。ちょっとくらい喧嘩っぽくなった方が。沢井 修習生にしたって、今じゃ半々らしいですよ。

谷 いったったつけ。沢井君に死刑廃止の立場を取るかどうか、聞いたことあったよね。
沢井 ええ。確か、弁護士で一緒にした時でしたよ。

谷 断ったよね。きっぱり。

沢井 ええ。決めてしまうと、自分のやり方に差し障りあると思ってましたから。

谷 ……でも。元々、弱者に肩入れする性格なのかな。

沢井 犯人は憎いですよ。もちろん。

谷 ……うん。そうだよな。

沢井 僕はね。間接的自殺として彼の願いを成就させることは避けたいんです。絶対にね。

谷 ああ。道連れだったから、まるで。一人で死ねなかったんだな。彼は。

沢井 死刑がなければ、彼は犯行に及ばなかったんですかね。…一人で自殺して、それで終わっていたんですかね。

谷 わからんよ。

沢井 死刑がなければ、和也は死なくても済んだんですかね。

谷 ……わからんよ。

沢井 (手記を手にとり見つめ)……全ての被害者遺族が犯人に対し、死刑を望んでいるというのは現実ではありません。それは私自身が被害者の家族であり、死刑制度に反対しているからそう言えるのです。しかし被害者遺族が死刑に反対した場合、ある誤解が生じます。被害者遺族の為に死刑があるという根強い信仰が人の心にあるのです。まるで私が被害にあった家族を愛してなかったのではないかと人は思うのです。「家族を愛していたのなら、なぜ加害者の死を望まないのだ」……望むべきでしょうか？ 死刑という殺人は、子供を返してくれないし、ただ苦痛を増すだけだと私は思うのです。

神田 (周りのエリアで遺影を持ち) 一刻も早く排除したいです。虚しさの原因が定まらないと、意味なく虚ろになるのです。記憶の焦点が合うと拘束された男の姿、血で染まったシャツ。どれほどの理由があって流された血なんでしょう。止まらない憎しみを探求するループ、不意に頂点に達すると震えが止まりません。……同じ空気を吸っていると、思うだけで苦しくなります。……だから私は息を止めて。早く去ってと願うのです。あの男が去った時、やっとループが途切れて、やっと呼吸ができるのです。

4

店には志穂(帽子をかぶっている)。川上はテーブルに。神田が店に入ってくる。

川上 ……嫌々会見なんかしてたら、その内ハマしでかすよ。

神田 ちゃんとテレビ見てよ。報道バラエティ的には立派な意見陳述だったそうですよ。

川上 そんなのいつの間にチェックしてんの。

神田 (携帯電話を素早くとり出し) ワンセグでチェックしてるよ。……何言われるかドキドキなんだから。

川上 誰も悪くは言わんでしょ。視聴者、敵に回せんし。

神田 ……何、不機嫌ね。傍聴席の抽選、また外れた？

川上 ありえんよ、日を追うごとに並ぶ人、増えてるんだから。

神田 この盛り上がりよう凄いもんね。遺族会ですら取り残され感あるから。

川上 ま。会見だけは、足しげく通っていますから。

神田 いつもいつも、ご苦勞様です。

川上 いえいえ。風格も出てきましたね。……ん。メイク、あっさりに変えた？

神田 褒めて。褒めて。ばっちりアドバイス受けてさ。も、園児まみれの生活だったから。

川上 すつきり、いい感じじゃない。

神田 (機嫌よく窓の外を眺め)……ね。この店、ご機嫌な立地条件なんだね。川上さんが入り浸っていたのも納得できるわ。

川上 ……どんな景色に見えますか。

神田 そうね。……練り出すか。呑みに。

川上 そう来るか。やっぱり。

志穂 夜桜もいいですよ。

川上 すっかり有名人なんだから。失態見せられんよ。やめとき、やめとき。

神田 心配ご無用。このシーズン、職場ひっくり返ってるから。やれ、戻らんと。

志穂 幼稚園。勤め大変なんですね。

神田 もう、卒園、入園、引き継ぎもろもろ……。って、良くご存知で。

志穂 店に置いてるんです。神田さんの本。

神田 あ。……ま、書いたの全部こちらの先生だから。

川上 わざわざ暴露せんでも。

神田 感想は出版社か、直接この人宛にどうぞ。

川上 読者からのコメント、結構きてるって。

神田 何それ知らない。

川上 荒木君から聞いてない？ 読者の感想ですら泣けるって。

神田 それは作家先生の手練手管でしょ。

川上 美化して書いていませんよ。

志穂 弁護士への苦情も増えたみたいですよ。

川上 ……それって何情報？

志穂 えっと。……荒木君情報ですが。

神田 そりや苦情来るよ。あの谷って弁護士、ナガイの心開かす為だって帽子被って入廷してきてさ。その格好じゃ始められんって、判事に注意されてんのに全然聞かないの。

志穂 ……ばかみたいですね。

神田 ……あなたも流行ってるの？ その帽子。

志穂 (少し気にして)あ。これは。おしゃれなんです。

神田 いずれにせよ涙の総数。私たちが数的有利になっているということか。

川上 ……ねえ、先々のこと考えて思ってたんだけど。

神田 何。第二弾出す話？

川上 こういうの。これからは自分で書いてかない？

神田 ……やっぱりそう思う。

川上 やっぱりって何。思ってたの？

神田 いや答えただけ。……正直、動揺してるよ。どうして急に。

川上 インタビュー受けることも増えたでしょ。原稿の依頼もあるでしょ。

神田 もう頼めないの？ あのね、新しく婦人雑誌から話してきたの。

川上 仕事、掛け持ちで大変だと思うけど。……ちぐはぐするでしょ。自分の話でも、実際に書いたわけじゃないから。

神田 ま。ちぐはぐはしてるね……。

川上 してるでしょ。……あなたの手記も、本当は気に入ってないみたいだし。

神田 くどいね。よくぞ私の半生、封じ込んでくれましたってほんと思ってるよ。

川上 これからも相談には乗るつもりだけど……。

神田 ……じゃ、私たち解散ってこと？

川上 元々結成した覚えはないけど。

神田 活動期間、約二年。絶頂期に解散したもんね。ピンク・レディーは。

川上 ピンク・レディーのイメージだったの。

神田 そ。マイク置く感じ？最後の歌、終わって。そーっと……。

川上 それ百恵ちゃんでしょ……。

神田 でも、なんで。

川上 訊かれない？ 遺族会の人に。

神田 何を訊かれるっていうの。

川上 ゴースト・ライターの存在。あなた全部書いてもらったって言いふらしてない？

神田 天地天命に誓って。

川上 さつき暴露したでしょ。この子にも。

神田 あなたが何者だかは言ってるじゃない。……大体、面倒だもん、あなた説明するの。

川上 ズルズルいかなんかいいよ。ただでさえ沢井さんの現状聞かれて困ってるでしょ。

神田 おっしゃる通りですけど……。

川上 先見据えなきや。つくなら嘘は少ない方がいい。

神田 私のこと、とても理解されましたね。

川上 だからね……。

神田 はい。(手をあげる)

川上 はい。(あてる)

神田 正直、この本。沢井君のこと、結構書かれているのは微妙だった。

川上 やつと本音が出たか。

神田 もちろん美化して書いてないよ。全て私が話したネタ通り。彼を避けるのもおかしな話だから、多少かまわないしその方がリアル。でも反響があつてね、私の周りでも。

川上 うん。

神田 沢井君を思って泣けたって人、案外、多くてさ。それ聞くと複雑になるね。荒木君が読者の声きかせてくれないのも、そういう理由あるんじゃないの？

川上 死刑廃止を願うコメントは却下したよ。

神田 載せたら売れないでしょ。

川上 売る目的で書いてないって。

神田 あの人、まともな人だと思ってたよ。……でも、見る目なかったな。

川上 関係ないよ。事件がみんな変えちゃったんだから。

神田 きつと川上さん、彼に響くところあるのよ。

川上 私が、沢井さんに？

神田 (ガンジス川を眺め) ……ね。妄想すると、体にいいよね。

川上 神田さん、こっそりしてるの？

神田 決着ついたら旅立とう。ガンジス見に行く。そこで人生見つめ直す。鏡見て辛い顔飾るんじゃない。虐げられた人、見放された人、必要とされることのない人のためにつくそうと思う。すっぴんでUV浴びてかまわない。生まれ変われば怖くない。

川上 なにもインドまで行かなくても。

神田 ここでもできるよ似たことは。ドブ川は流れてる。歩けば虐げられている人がそこにいる。公園でカラオケ歌う哀れなおばさんはもう一人のわたし。寄り添うこともできなくない。でも辛いね。とりたいね距離をジェット機で。携帯の圏外までいいんだから。

川上 不況知らずのインドは携帯バブル。

神田 知ったこっちゃ無い。

川上 どうする根強いカースト制度。

神田 不自由な方がなんかいい。言語、習慣、価値、不可能な関わりの方がなんかいい。

川上 同情じゃなくて？

神田 不可能な世界の方が希望してるじゃない。私の都合でしょって言われりや小さくなるけど、そうでなきゃ。…川上さんだってそうだったんじゃないの？…元々、私たちの関係にしたってどれだけ離れていたことか。でしょ？ 違うの。

川上 何が言いたいのかな。

神田 この通じない感覚。とはいえ心地よい手応えのある。互いに都合良く誤解できる関係。ネットで繋がったよね。でも練炭自殺のような負じゃなくプラスの要素でさ。

川上 ピンク・レディーじゃなかったの。

神田 グループ名なんかどうでもよくなって。

川上 言ったのそっちでしょ…。

神田 宇宙の隅っこから隅っこ。ずれて、ずれて、カチって偶然重なったのよ。…ちょっとずれると、もう永久に戻らないかもしれないけれど。

川上 誰の話よ。

神田 (エル・グレコが描くマリアの如く虚空を見上げ)……生まれたばかりのあの子は、何億光年をたった一人で旅をしてきたような顔をしていた。きっと宇宙の果てから僕たちに大切なメッセージを届けに来てくれたに違いない…。

川上 あなたが話したんだからね。沢井さんのそういう語録。

神田 (手で顔を覆い)……ダメだ。もどかしいと、すごく眠くなってくる。

川上 ちよつと、と。寝るのか？

神田 ……これ治らんね。一生つきあうね。

川上 事務所、開けてもらおうか？

神田 ……ね。くじ運悪くても、会見来てくれるんでしょ。闘い終わったら待っていてくれるんでしょ。

川上 カラオケも最後まで付き合ってるでしょ。あなた寝ちやうけど。

神田 ありがと。(顔をパチンと叩き)まだ馬力ださないと。幼稚園で雑務。私にしか務ま

らん仕事あるから。……とっぷりとぼりが降りたね。妖怪てるんてるんの時間だよ。
川上 気をつけてね。

神田、店から去る。

志穂 ……ここから見える景色って、訳ありなんですよね。

川上 え。桜並木でしょ。

志穂 あの暗い、茶色い建物。

川上 ああ。川の向こうの。

志穂 拘置所の前、通るんです。門の辺りにたむろする、それっぽい人たちとよくすれ違います。

川上 でも、キンピカのビルから出てくる人たちが皆健全かっていうと、どうかしら。

志穂 そうですか？ 見た目も中身もガタきてそう。古いし壁こげてるし。グラグラ来たら潰れそう。

川上 そんな、やわな作りしてないでしょ。

志穂 執行まで死なれちゃ困るんですよ、死刑囚って。

川上 まあ。刑をもつて罪を償うわけですから。

志穂 ……ガラス越しの会話。されたことあるんですよね。

川上 はい？

志穂 覗いてたんです。川上さんのホーム・ページ。

川上 ……どうして。興味あったの？

志穂 流行ってましたから。ウシオトコの予言。わたしは信じてた派だったんです。……だから、当たった時、すごいって。……こんなこと大きな声で言っちゃダメですけど。

川上 黙ってた方がいいんじゃない。

志穂 ダメなんですか？

川上 後ろ指さされるよ。

志穂 ……なんだか川上さん、思ってた人じゃない。

川上 どんな人なら良かったの？

志穂 だから書きこむんですね。みんな言えないから。

川上 言えないって？

志穂 ウシオトコは死刑にされたんですよ。ナガイワタルの犯行のすぐあと。ウシオトコは妖怪件のように予言が当たるとすぐに死んじゃうんだから。

川上 ありえない話よ。

志穂 次は、ナガイが新しいウシオトコになる番で……。

川上 彼は黙秘してるだけなんだから。

志穂 川上さん、予言を信じる派じゃなかったんですか？

川上 流れたデマに感化されただけよ。予言が当たったって、そんなの嘘なのよ。

志穂 ウシオトコの予言は死刑囚の声にならない声だってホームページで掲げましたよね。死刑囚は私たちの見えない場所で殺される牛のようだって。

川上 ……ごめんなさいね、勘違いさせて。

志穂 違うんですか？

川上 ウシオトコなんていないのよ。……予言の噂を引用したのは、浅はかでした。被害に遭われた方には本当に気の毒で、ホーム・ページも沢山の声を聞いて閉じました。

志穂 沢山の声ですか。

川上 ええ。神田さんも、その一人で……。

松本、店に入ってくる。

松本 ごめん、シホちゃん。忙しくなかった？

志穂 いつも通りですよ。奥さんは。

松本 送り迎えだけだから。……もう、学校あるでしょ。

志穂 いいんです。遅刻した分、ありますから。

谷、店に入ってくる。

谷 だからって学校に遅れちゃ、悪循環じゃないの。ぐるぐる遅刻しっぱなしになるよ。

志穂 あ、はい。……すみません。

谷 久しぶり。

松本 (川上に) 今日はずいぶんゆっくりされていますね。

川上 いえ、もう帰るから。

谷 何。つれないね。いいじゃないの。ちよつとくらい。

松本 (谷に) ……アメリカンでいいですか。

谷 様子見に来ただけだから。

松本 そうですか。

谷 話すことなんかないでしょ。

志穂 じゃ、マスター。上がりますね。(鏡前に入る)

松本 はい。お疲れ様。

谷 あるよ。(手記を取り出し) これ、ナガイさんに届けられていたみたい。……出版物だと差し入れしやすいくらいですか。

川上 いけませんか。

谷 知りたいだけ。反省させたいのか、死んでほしいのか。どっちなの。

川上 被害者の思いを伝えるだけです。

谷 ジャーナリストとして？

川上 人として。

谷 君は満足する。でもわかっている？ 遺族の存在は被告人にプレッシャーを与える。誰

でもプレッシャー受ける相手には誤解招くことしちゃうよね。今、公判中なんだよ。

川上 私は反省もせずに死んで行く。それはどうかと思うだけです。

谷 それ、心の救済になるよね。……神田さんとの総意ですか。違うでしょ。あなたの独

断でしょ。……やっつてること矛盾してない？

川上 ……。

谷 後悔してるんでしょ。一切、謝罪せずに執行された死刑囚。最後まで支援してたよね。
志穂 (鏡前から出てきて) ……行ってきます。

谷 寄り添う立場に戻るの？ またバッシング浴びるよ。あなたも誤解を招く人だから。

志穂、店から去る。

川上 あなたに言われたくありません。

谷 支援していた彼のこと。ウシオトコって呼ばれてた人だと思ってる？

川上 ありえませんかよ。そんなこと。

谷 無くもないでしょ。ナガイさんの犯行の直後、見せしめのように執行された死刑囚の一人なんだから。

川上 ただの偶然よ。周りが騒ぎ立てただけでしょ。

谷 執行されるには理由があったはずだ。重大事件の後なら尚更ね。……あからさまに事件に関連する人物が選ばれるから。

川上 彼は人でしたよ。ウシオトコなんかじゃありません。

谷 そうですか。あなたにはそう見えただ……。

遊覧船の汽笛が聞こえる。

谷、店から去る。

松本 ……川上さん。ずっとその席に座っていらしたんですか？

川上 このテーブルですか。

松本 家内から伺っていたんですよ。あなたはその特等席でいつも手紙を書いていたって。

川上 ええ。眺めるにはここがちょうどよかったんですよ。

松本 随分、辛い目にもおあいになったとか。

川上 慣れっことですよ。孤独なのは。

志穂、店の外のエリアで。

志穂 ナガイワタルは沈黙を続けた。大方の予想で死刑は決定的である。

街の声 2 法廷での彼の姿は、似顔絵により公開されたが、帽子をかぶったままだった。

街の声 3 彼は裁判長の指示にも従わず、決して頭部を見せることはしなかった。

5

喫茶店の中には松本、川上。神田が鼻歌まじりが入ってくる。

川上 お帰り。

神田 ただいま！

川上 昭和くさい。ものすごくおばさん入ってるよ。

神田 こんな感じで帰って来るのよ。うちの肝っ玉母さん。

川上 ね。どうしたの、今日は。

神田 ……マスター。お水。

松本 水だけでいいの？

川上 薬、飲むだけだから。

神田 ……あゝ、ちよつと横になるわ。やってられん。

川上 待って。何か言うことあるんじゃないの？

神田 ちゝ、やられたつ。口惜しい。(脇腹をかかえ) 痛ゝつ。不意をつかれた。

川上 どういうこと。

神田 (脇腹を示し) ……このへん。

川上 えん？

神田 (示す場所を変え) じゃ、このへんと仮定しよう。……いたたたた。

川上 なんともないんでしょ。ふざけないの。

神田 血が見えないか。服、黒いから。

川上 何も見えないよ。あなた腹黒いから。

神田 片腹痛いわ。致命傷ですよ。

川上 会見すつぼかしてどこ行つてたの。

神田 あんた抜ける抜けるつて、散々言つといて、何よ。

川上 この期に及んでないでしょう。遺族会の人たち、たじたじだったんだから。

神田 (七五調で) 会見ね ドタキャンしたよ 悪いけど。

川上 化粧崩れたの？

神田 (七五調で) 崩れんよ 完璧なんだよ 朝メイク。

川上 ネットの中傷を見た。

神田 (七五調で) ネット無視 無駄な殺意は 起こさない。(と、テーブルに突つ伏す)

松本 (水を出し) 一体どうしたんですか。

川上 (神田をゆすり) 川柳になつてるよ。全部、季語が入ってないんだよ。

神田 ……酷い書き込みあるね。いずれ立場利用してNPO代表になりそう。その後、与

党推薦たくらんどる。牛ヴァーサス鬼とかさ。鬼ヨメだったら笑えるよ。鬼つてなあに？

川上 書き込みなんて人の鬱憤が書き殴られてるだけなんだから。

神田 表向きじゃ悲劇の母。法廷というコロセウムの女闘牛士。でも、ネットじゃこれだ。

川上 釘でりや打たれるの。

神田 打たれりやへこむよ。たつぷり褒められても、ほんの一粒けなされたらダメだわ。

川上 真に受けてたら身が持たないつて。

神田 私の最大の武器は目立たぬことだった。皆と同じが大切。それが私の処世術……。

川上 判決下るつてのに。どうして波風たてるの。

神田 (薬をほおぼり水で流し込む) ……ちゃんと向かったよ。公判後。会見の会場。

川上 来なかったじゃない。

神田 向かったわよ放心状態で。そしたら、すつとその嫌な感じする人、近づいて来て。

川上 嫌な感じする人？

神田 いるじゃん、一目見て、あ、敵じゃんかなわんという輩。あなたがソウル・メイ
トだったら、奴はソウル・エネミー。舌に斧を持って生まれ落ちて来たサイよ。がね、

「神田さん。離婚されたご主人のこと、詳しくお聞かせ願いますでしょうか？」だって。
川上 どの記者。

神田 「セブン」か「自身」か知らんけど。「沢井吉生さんという方が、ナガイの弁護団に携わってらっしゃいますよね。正直なところお聞かせ下さい。」って。はあ？

川上 で。なんて答えたの？

神田 はあ？ っつて、んだけ。でも、思いつきり動揺した顔を……。

川上 狙われた？

神田 (七五調で) カメラがね きらって光って、ピカぱしやり。

神田・川上 いたたたたた。

松本 大丈夫ですか？

川上 ……刺されたね。てっきり油断したね。

神田 タレ込みですよ。誰かのやつかみですよ。戻れるかな大人しくしたとして。騙し騙しやってきたけど、もうこれまでかなあ。

荒木、皿を手に持ち入ってくる。

荒木 マスター。ごちそうさまでした。

松本 いいよ。ほんと。志穂ちゃん、下げに行ってもらうから。

荒木 入っていないの？ 志穂ちゃん。

松本 大きい魚が跳ねたからって。ガンジス川に。

荒木 釣り見に行ってたんだのんき。

川上 ……君がタレ込んだのかのんき。どうされました。お揃いで。

神田 とぼけた顔してババンバン。

荒木 ん。カラオケ喫茶始めました？

神田 荒木君の訳ないか。本の売行きに差し障りあるよね。

川上 (荒木に) テレビで会見流れてたでしょ。

荒木 あとで録画チェックしますけど。

川上 なんでもまだ見てないの。危機的状况ですよ。

荒木 危機的状况って？

神田 ……じゃ、私、寝るわ。

川上 寝るのか、おい。

荒木 冴えないんだ。何があったか知らないけれど。

神田 許容範囲を越えたエピソードだわ。……遙か昔、ゲッセマネのオリーブ畑で、イエスの弟子たちが祈りの間、一時間も待てずに寝ちまったのは、そのあと降りかかる試験が、あまりにも唐突で受け入れがたい未来だったからなのです。

川上 状況がさっぱり飲み込めない。

神田 恵子……。布団、敷いとくれ。

荒木 あほか。

松本 ……掛けるもの、持ってきてきましょうか。

川上 いいの、甘えてるだけなんだから。(と、自分の上着を掛ける)
神田 ありがとう。母さんの次に優しいね。
川上 ぐっつすり寝たら。ぱっと起きるんだよ。もう迷惑な歳なんだからね！

沢井、店に入ってくる。

松本 ……あ。いらっしやい。

荒木 あ。どうも。その節は。

沢井 どうも。

川上 ……お会いしてますよね。会場近辺で、何げに。

沢井 いや。でもないですよ。

川上 ……どうされました。

沢井 いいえ。谷さんは……。

松本 いらっしやってませんよ。

沢井 そうですか。……ですね。(去ろうと)

川上 え。お帰りですか。

沢井 いえ。いるから。……その人、神田さんでしょ。

川上 沢井さんも訊かれたりしました？

沢井 何のことですか。

神田 とぼけて。

沢井 何のこと。

神田 騒がれるよ。

沢井 何だよ。……唐突に。

神田 被害者遺族代表・神田尚子の元夫は、なんと人権派弁護士、谷茂のお手伝い。知られざる骨肉の裏事情。

沢井 聞かれたのか？ 君も……。

神田 ……。(テーブルに突っ伏す)

沢井 寝るなよ。

荒木 どの記者でしょう。

沢井 こんな低レベル、「自身」か「セブン」に決まってるでしょ。

川上 災難ですね。二人揃って。

荒木 ……やっぱり不自然なんですよ。興味持たれてるのに。

川上 不自然って何が。

荒木 手記の反響ですよ。沢井さんも興味持たれちゃったのに、表には神田さん一人しか出てこない。勘繰られるのも仕方ありません。

神田 ダメですか。母一人じゃ、いけませんか。ウチの母はシングルマザーでしたよ。不自然って何。くだらない。女性蔑視ですよ。

荒木 そんなこと言ってませんよ。大衆の興味は尽きることがないって話ですよ。

沢井 興味持たれてるって？

荒木 同情されてる方が多いんです。沢井さんに。

沢井 あんたらが都合良く書いたんだろ。

荒木 でも、気持ち、前向きませんか。

沢井 向かないよ。

荒木 考えようですよ。次回は沢井さんのご事情も含めて出せば理解されますよ。

沢井 売れない思想はダメなんだろ。

神田 もういいよ。

沢井 いいってなんだ。しつかり起きてるんだろ。

神田 闘うから、この人と。

沢井 かまわないよ。良心の許す範囲なら。でもこの人、どういう人なのかわかってるの。

神田 信用できる人ですよ。

松本 お客さん……。

沢井 どんな活動してきた人か知ってるんだろ。

松本 ご注文よろしいですか。

沢井 ……ああ。じゃ、あったかいの。

松本 (荒木に) 君は。

荒木 じゃ。……いただきます。

沢井 (テーブルにつく) 死刑判決でるよ。間違いない。君たちの望み通りになるよ。

神田 道理でしょ。

沢井 でも先生方は即日控訴すると思う。精神鑑定をやり直す余地があるから。ま、真面

目とここで論じてても不毛だけど。

神田 茶番でしょ。引き延ばすための。

沢井 そう言うだろ簡単に。こっちは必死なんだよ。手記出したりテレビで発言するのは

かまわないけど一体どんな状況を生んでるか考えてるのかな。

神田 煽動してるっていうの？ 弁護に差し障りあるからやめろって？

沢井 一冊の手記が世界を変えることもあるんだよ。そういうもんだろ。

川上 いい意味で言ってるんですか？

沢井 酷い意味ですよ。もちろん。

神田 コメント没になったの、すごく根に持ってる。

沢井 真面目に話したいんだけど。

川上 私は当事者じゃありませんが関わる権利はあると思うんです。彼女とは多くのもの

を分かち合いました。

沢井 あなた一般人じゃないでしょ。懲戒請求を求める手紙に苦情の電話。対応でどれだ

け忙殺されたと思うの。まともな見解を持ったジャーナリストのすることじゃない。

川上 誤解を与えてるのはあなたたちでしょ。

沢井 目立ちたいんだったら名前を出すべきだ。

川上 寄り添う行為ですよ。

沢井 加害者を責める行為は別でしょ。分けて考えないと危険だよ、感情を直結させちゃ

いかにでしょ。やられたらやりかえすじゃないでしょ。戦争の口実と一緒ですよ。

川上 それは大げさですよ。

沢井 構造は一緒だよ。……イメージしろよ。プロだろ。

川上 ……人権は大事ですよ。何ものにも代え難いものですよ。

沢井 世間を巻き込んで被告の死を叫んでどうするの。

荒木 世の風潮を悪くしていると？

沢井 人を殺したら人じゃなくなるってことですか。一緒ですよ。ウシオトコって冷やかにしてる輩と、一緒になってる。

神田 あるの。命を奪った人に。それが。

沢井 どこまでも奪われないのが人権なんだよ。

神田 一体、どんな思考なの。

川上 弁護団に参加されてるわけじゃないんですよ。

沢井 人として話してるつもりだよ。……俺は。

神田 父親としての考え方はないの。

沢井 持ってるよ。当たり前たる。

神田 信じられないんだ。

沢井 酷い目にあってるじゃないの。俺も。

神田 憎いと思ってるじゃないでしょ。

沢井 憎いさ。……罪は。

川上 罪を憎んで人を恨まずですか。

沢井 死んで詫びを入れるってことじゃない。死刑ってなんだよ。失われるだけだ。人の命が失われるだけだ。人が納得するかしないかってだけのことなのに。

神田 ついて行けないって。

沢井 死刑は、誰かの間接的な自殺に利用されるだけだ。過去にもこの先にもずっと。

神田 また死刑反対ですか。

沢井 死刑なんかあっても犯罪の抑止はできない。歯止めのあるなんて幻想なんだ、残酷な行為の手法を社会に与えるだけなんだよ。

川上 良い意味ですか。一冊の本が世界を変える。

沢井 ベツカリアの主張だよ。十九世紀、世界初の死刑廃止論。その後、どんどん死刑が廃止された。この国とアメリカぐらいなんだよ、先進国で今みたいな考え方をしてるの。

神田 子供を利用しないで。

沢井 ……この国の主流が間違っている。まるで敵討ちだ。

神田 敵討ちでいい。反省の言葉なんか聞いても意味がない。何が解決というのなら、いなくなつて。それだけよ。人殺しなんだから。

沢井 死刑を肯定するのなら、それは同時に人殺しも肯定することになるんじゃないか？ それはどっちも人が人を殺す行為なんだから。その反対に、君が願うように殺人を許せないのなら、死刑も許せないことにはならないか。この二つは一緒に否定されたり肯定されたりするべきなんだよ。人殺しを許せないのなら、否定するべきじゃないのか？

神田 もういいよ。

沢井 理解してくれよ。このままじゃ和也は無駄死になんだって。……俺なりに突き詰めて考えたんだから。

神田 理解したよ。あなたを心の底から。それでよく解ったの。私の人生のパターンを。私はとことん裏切られる。裏切られる冷たい人達を常に選んで生きて来たんだから。

沢井 何だよ。それ。

神田 いいんですよ。裏切っちゃって。どーんどん裏切っちゃって。

沢井 俺に血も涙もないようなこと……。

神田 涙はあるよ。知ってるよ。沢井君、よく泣くじゃない。でも、私には全く理解できない。それは悔し涙？ 嬉し涙？ なに涙？

沢井 どうして。わかってくれないのかな。

神田 あなたはね。あの子のこと、愛してなかったのよ。

沢井 何言ってるの。

神田 いちばん辛かったことはね……。

沢井 そこは一緒だって。同じだよ。

神田 違うでしょ。

沢井 かもしれない。君はいたから。ずっと和也の側に。俺は違うよ。それはわかる。

神田 ええ。あなた違う。

沢井 テレビに気付いた仲間から連絡があって、まさかって、運ばれた病院に駆けつけた。

神田 いてくれなかった。あなたはどこにも。

沢井 いたじゃない、俺。何見てたの。

神田 あなたね。和也からずっと離れて、何考えてたの。……どうして、誰に電話してたのよ。泣きながら、彼は違うんだって。誰に、どんなことを頼み込んでいたのよ。……あなたはどこにもいなかった。

沢井 ……わかってくれよ。俺のこと。

神田 それがいちばん辛かったこと。全然違うでしょ。私とはもう他人だけど沢井君、父親でしょ。あなたのやってることは、私の慈しみの生活の全否定ですよ。……でも、そうなんだって今は納得している。私はあなたを選んでしまったことを納得している。もしかしたら、全ての事象は私が引き寄せているのかって思い込むこともできる。でも私は強くなるうと思ってる。だから否定したい。私と母を捨てて行った父を。和也を捨てたあなたを。全てを引き寄せる人生のパターンを。私は一切、悪くないって。

沢井 ……今は矛先にとらわれているだけなんだよ。

神田 私はあの男が人に見えない。他の遺族の人も、人に見えないってみんな言ってる。

沢井 虚しさしか残らないって。

神田 私がなんの努力をしなくても、彼は死刑になりますよ。あなたたちがどんなに努力しても死刑になりますよ。それが道理ですよ。

沢井 させちゃいけないんだって。

神田 私たちが間違っているってこと？ 不自然だってこと？

沢井 もちろん。権利はあるんだ。

神田 この手で刺すのを我慢して訴えるのがどうしていけないの。

沢井 死刑囚が毎日どんな状況で生活して、執行を告げられるかもしれない朝を、どんな気持ちで迎えているかなんて誰も知らないだろう。知ることができないんだから。……多くの人を冷たくさせるのはよそうよ。

神田 冷たいってあなたの口から聞きたくない。……知らないでしょ。ナイフ隠し持っている人いるのよ。ずっと握りしめて我慢している人いるんだよ。その沈黙の行為に耳を

貸す気がありますか。

沢井 ……和也はあの男を殺してくれと言うのだろうか。あの男が死んで、あの子は喜びの涙を流すのだろうか。とてもそうとは思えない。

神田 和也はいないじゃない。どう想像しようが、あなた一人の考えじゃない。

沢井 人を牛呼ばわりはしない！

神田 私は鬼って言われても我慢してるよ。あの子が聞いたらどうなのよ。私にはあの男が牛にしか見えない。その場にいる皆も牛って言ってる。……ただの牛が私たちに見られないところで、ゴロ寝して飼育員に飼われて、草食ったり一人欲情したりしてある朝、屠殺場に連れてかれて、きゅっとシメられるのよ。それが私たちの知らぬ間に食卓に並んでいようが、生活に混入してようが、皆知らずに食べてるんだから。そんな営みで満足よ。死刑がいけないなんて気にして生活しろって言う方が元々おかしな話なのよ。

志穂、店に入ってくる。

志穂 ……ただいま。

松本 あ、あ。どうだった。

志穂 おじさんたちが川の主だった。こゝれぐらいの緑色したコイ。

松本 え。釣りあげちゃったの。

志穂 寄ってたかって、写真撮って。食うの食わないのって。

松本 酷いね。生きてた？

志穂 可哀想になったから、「お父さん」って言ったの。

松本 え。おじさんたちに。

志穂 鯉に。

松本 鯉に？

志穂 生まれ変わりなんですって。言ったら。ささうって。

荒木 何で。

志穂 そしたら、皆、押し黙って。どぼんって。

松本 そうなの。

志穂 ……あれ、ね。そのホット。出しゃいいの？

松本 いや、いや。……お客さんに出すころあい逃してね。

荒木 ……ああ、すみません。

志穂 じゃ、谷先生のも。

松本 え。

志穂 先生来るよ。向こうから橋渡ってきてる。

松本 なんだ。声、かけてあげりゃいいのに。

神田 ……もう帰るね。戻んなきゃ、一日休み取れる身分じゃないんだ。

沢井 来るよな。判決日。

荒木 あ。いただきますよ。それ。

川上 (遺影を示し) 神田さん。忘れちゃダメだった。

沢井 和也の遺影かよ……。

神田 (遺影を手に取り) さわんないで!

谷、店に入ってくる。

谷 ……どうしたの。繁盛してるじゃない。

松本 ウチは静かなのが売りなんですけどね。

谷 (神田に) ……今日は会見キャンセルされたんですね。

神田 谷さん。この人、ナガイに会わせているでしょ。

谷 ……ん。どういうことかな。

神田 ナガイワタルに。違うの。

谷 沢井君。被害者遺族でしょ。

神田 できるでしょ。弁護士として。

谷 だったらどうなんですか。

神田 利用しないでもらえますか。この人、被害者の親ですよ。

谷 できませんよ。沢井君、憎んでるから。

神田 ……嘘ばっかり。

神田、店から去る。

谷 ……のつぴきならない様子だね。修復の方向じゃないんだ。

沢井 考えられませんかよ。

谷 どうしたの、一体。

沢井 いえ。まあ、パターンなんですって。

谷 何。パターンって。

沢井 弱い人なんです。あの人も、俺も。

谷 ああ。寄り添われるべきだ。

沢井 パターンは、人生の為に用意された、自分で会得した練習問題だと思っ
ていますよ。でもね……。

谷 君たちには理不尽すぎるだろ。

沢井 あまりにも大きいですね。

谷 ああ。

沢井 人は絶対に避けられなく、とても越えられず、諦めることも逃げることもできない問題に直面したとき、神を求めるでしょうか。それとも理念を欲するでしょうか。それとも、死を選ぶでしょうか。

谷 死んじやおしまいだらう。

沢井 だから理解できる範囲内で踏みとどまるつもりですよ。なんとしても。でも、正直、判らないでもない。ここまで追いつめられると……。

谷 神は拒んでるんじゃないの?

沢井 ナガイに死刑が下されても世間は当たり前のことだと思っただけなんですよ。和也のことも、他の被害者の方たちも、時間と共に忘れ去られてしまっ
うんですよ。

谷 自己中心的で残虐な行為としか記憶されないよ。間接的な自殺だったことも理解されずに。……一番印象に残ったことが教訓とすり替わってしまうんだ。

沢井 事務所戻ってます。仕事、手つかずなんで。

谷 無理すんなよ。

沢井 他人の離婚も大変ですよ。ほんと、エネルギー要りますね。

谷 ね。沢井君。キリストだったらどうするだろうね。

沢井 え。

谷 ふと思ったんだけどさ。彼ならどうするだろう。

沢井 暴れるんじゃないですか。

谷 暴れるのか。神聖な法廷で、かなわんな。

沢井 全てが間違ってると思っただから彼は神の宮殿で暴れたんですよ。

谷 ……ね。ありなんだよ、沢井君。求めるってのもさ。

沢井 失礼します。

沢井、店から去る。

松本 捉えどころのない事件が多いですね。昔だったらそれなりの事情があったような。

生活苦の末とか、怨恨であるとか。あればいいっていう訳ではないけれど……。

荒木 理不尽な事件は増えていますよね。

谷 殺人自体は減ってるよ。

荒木 そうは言いますが……。

谷 判るよ、体感する治安は悪くなってるよね。でも、誰かが騒いでるせいだろう。

荒木 マスコミのせいだって言いたいんですか。

谷 よろこんで市民も消費するよね。

松本 考えてもきりがいい……。

谷 でも、ある所では理不尽な殺人が増えている。

荒木 ……ある所って。

谷 余命幾ばくもない人。身も心も更生した人。冤罪の疑いのある無実の人への殺人がね。

荒木 死刑は理不尽じゃないでしょ。仕方ないですよ。

谷 不透明なことが多すぎるんだよ。仕方がないっていうくらいなら、執行に立ち会えばいい。中に入ってみればいい。

荒木 言われても、市民には不可能でしょ。

谷 ……目隠しの袋をかけられると何人かに一人は必ず暴れます。まわりの刑務官が羽交い締めにして首に縄をかけ、床が抜けるボタンを必死の思いで押す。ターンって音が響くと、下の階まで落とされ、吊るされる。五つのボタン。誰が押したか判らないようになってるけど、そんなの問題じゃない。……その場の人間だけじゃないんだボタンを押してるのは。サインする大臣でも、声高に訴える被害者でものっかるメディアでもない……。

松本 すみませんが今夜は閉めていいですか。

荒木 え。どうしたの。

松本 悪いね。気分がすぐれない。シホちゃんも上がろうか。

志穂 ええ……。行ってきます。(と、鏡前に)

荒木 大丈夫ですか。

谷 検事は担当した死刑囚の執行には立ち会わないことになってるが、その手で殺す刑務官は通達されれば抗えない。何年も顔を付き合わせて心が通った間柄なのに……。

松本 もっともらしいことをおっしゃいますね。でも、あなた方は理想ばかりが先で被告も被害者も、そっちのけになっていませんか。

谷 冤罪の疑いがある人はまだ残ってる。無実の人がでつち上げのシナリオで殺されようとしている。

荒木 ……ありえるんですか。言われますけど、冤罪って。

松本 あの。言いませんでしたか。……君も悪いけど。

谷 先輩から、冤罪は必要悪だからって頭ごなしに言われたよ。黙ってるって。

荒木 ……必要悪って。

谷 検察採用、駆け出しの頃、落としたら認めてやるって焚き付けられた。容疑者は凄む俺の言うことには、何もかも黙って認める男だった。検察の筋書き通りに、別れた妻の家族を殺害した手口を何もかも。……違和感はなかった。「被害者と共に泣く検察」を自負していたからね。……ところが生き残った幼い娘が一人いて、事件の後、やつと口を開くことができた時。……その子は、お父さんは私を守ってくれたって言ったんだ。

荒木 生き残った娘が……。

谷 子供の思い違いだと思った。認めたくない分、なおさらね。……娘には、このことは誰にも言うんじゃないって言いかせた。ところが、その後、だんだん男の態度に疑心が募りはじめた。……心の底で真犯人を憎んでいるようにも見えてきて。死なせてしまった絶望から、自ら死刑を選択しているようにも思えてきて。

荒木 引き返せなかったんですか？

谷 判決が下って動揺したよ。担当を外されると冤罪の噂も沸いて出た。自慢げに犯行をほのめかす囚人がいるという。でも、ひとたび自白したら裁判で覆すことは難しい。

確定した時は荒れたね。……俺は立場を変えるしかなかった。再び男と会って、正当な裁判を受けさせるために。残された娘のため、生きる希望を伝えようとした。

志穂、鏡前で帽子を脱ぐと、髪をかきあげ頭部をしきりに気にする。

遊覧船の汽笛が遠くから聞こえる。

志穂の頭部に角なんてあるはずがない。

荒木 ……助かったんですか。その人。

谷 もう人が変わってしまったっていた。……娘を会わせてみたものの。その子は、人じゃなくなつたと口をつぐんだ。……会うこともできなくなった。男の都合で、と言う。

荒木 どうなっちゃったんです。

谷 予言する死刑囚なんて、いるわけがないんだよ……。

川上 ウシオトコの話は関係ないでしょ。

谷 その男の刑が執行されたのは、ナガイさんの犯行直後だった。あなたが支援していた

確定囚たちと一緒に。

川上 だからってそうとは限らないでしょう。

荒木 確か執行された内の誰かがウシオトコじゃないかって、騒がれましたよね。

谷 執行後、ナガイさんは怯え始めた。……どうして選ばれ、殺される人がいたんだろうって。

荒木 真相は答えられないんですか？

谷 知ることができないんだ。

川上 デマだったのよ。

谷 デマのはずなんだよ。……なのにナガイさんは壊れていく。それでも公判は進められる。……言い聞かせてるよ予言なんかデタラメだって。でも彼の中では、居たことになっちゃった。……周りからも決めつけられる。新たなウシオトコだって。

松本 けれど彼がやってしまったことを考えてみて下さい。……五人も殺したんですよ。

私は死刑に一票入れますね。

谷 まともな裁判を受けさせた上での話しじゃないですか。立ち会う辛さはご存知でしょ……。

荒木 でもナガイは死刑になりたいから、ウシオトコになったわけでしょ。全く彼の望み通りじゃないですか。

谷 人なんだよナガイさんは！

志穂 (帽子をぎゅつとかぶり鏡前から) ……ガラス越しに現れたのは、牛だったのよ。

荒木 志穂ちゃん？

志穂 ある朝突然、牛たちは、人に連れていかれるの。

川上 ……どうしたの。

志穂 その時あわれな牛たちは声にならない鳴き声で、とっても小さな声で鳴く。仲間の牛は声が伝わり鳴くけれど、世話する人は黙るのよ。

荒木 何、言ってるの。……ね。

志穂 人は、黙って鳴くからよ。牛と世話する人の声は、決して外へは伝わらない。だからこっそり人づてに、呪いの言葉を吐いたのよ。予言の事件が起こった時、私はさまざまと鳴きました。そのあと父さん殺されて、心の底から泣きました。

志穂、去る。

荒木 ……志穂ちゃん。

荒木は志穂を追いかけるが、街の中で見失ってしまう。

志穂、帽子を脱ぎ、声なき叫び声をあげる。

川を横断する船の汽笛が声をかき消す。

街の声2 主任弁護士、谷茂はナガイワタルの帽子をとることを決断し、公判に挑んだ。

街の声5 注目の中、人々の前に現れたのは頭を丸めたごく普通の青年であった。

街の声3 彼は、終始うつむき沈黙していた。

街の声2 谷茂はナガイの姿を示し、再度、拘置所での拘禁性の病であると主張。改めて
裁判の停止、取り消しを求めた。

6

荒木と志穂、ガンジス川を眺めている。

荒木 ……シホちゃん見た。地裁で並ぶ人。半端なかったね。

志穂 見たの？ ナガイの素顔。

荒木 まさか。結局、傍聴券取れなかったし。

志穂 見てないんだ。

荒木 戸惑う人はいるよ。でも誰も否定しないね。

志穂 馬鹿じゃないの。

荒木 ……言葉を持たないからって。一人で立てず、引っ張らないと歩かないからって。
頭に角が生えてるはずだって。

志穂 みんな待ってたのよ。はけ口が現れるのを。

荒木 ナガイは牛に違いないって。

志穂 誰でも人には角があるのよ。なのに、みんな。帽子もかぶらないで。

川上、店に入る。

荒木 お疲れさまです。

川上 マスターは？

荒木 奥さんを散歩に。……会見の方は。

川上 滞りなく。表向きは、いたって平穩に。

荒木 参加されてたんですね。沢井先生。

川上 ええ。傍聴席に。被害者遺族としてね。

荒木 ……じゃ、気分変えて祝賀会、開きますか。カラオケでがつり。昭和歌謡。

川上 神田さん。歌う気分になるのかな。

荒木 願いが叶ったわけでしょ。調子に乗ってもらわないと。

志穂 でも、これって決まった事がその通りに行われただけですよね。

荒木 そりゃ、だって。事件が事件だろ。

小山、入ってくる。

志穂 (川上にコーヒーを出し)……いらっしやいませ。

小山 こんにちは。

荒木 えっと。谷さんの事務所の。

小山 あの、神田さんは……さすがにいらしてませんね。

川上 ええ。その足で、墓前に報告に。

小山 そうですか。……何かおっしゃってました？

川上 いえ。……これとって。彼女、会見も欠席しましたから。
小山 そうですか。

川上 ……彼女の証言が必要なんですか。

小山 いえ。そういうわけじゃ。

荒木 ところで、沢井さんは。……公判の後。

小山 ええ。谷先生が出向いてます。

店のエリアの一部が面会室になる。谷と沢井、テーブルを挟んで向かい合う。

沢井 黙秘の仕方は心得ていますよ。

谷 そりゃ、そうだろう。

沢井 弁護は身柄を拘束されたらすぐに接見。検察に対する心構えと勇気づけでしょ。

谷 ……早く、仕事しろって？

沢井 笑っちゃいますね。

谷 大丈夫か。自分になると、勝手が違ってパニくるだろ。

沢井 なんともないですよ。

谷 変な証言しなかったらうな。

川上 ……谷さんが、会ってらっしゃるんですね。

小山 はい。勇気づけです。

谷 ……軽くて済むよ。早く出してやるから。

沢井 検察。本当、たち悪いですね。正義を振りかざして陶酔してますよ。錯覚して

ますね。あれは検察官個人の正義なんかじゃない。国家の力を勘違いしてる。

谷 古傷痛むな。それ言われると。

沢井 ほんと実感しましたよ。

谷 でも君の方が充分すぎるほどたちが悪い。

沢井 ……。

谷 どうした。俺に黙秘してどうする。

沢井 ……。

谷 検察には何聞かれても、答えるんじゃないぞ。

沢井 ……。

谷 でも、俺には口きけよ。……ナガイさんじゃないんだから。

沢井 ……。

谷 な。衝動的だったんじゃないか。計画性なんて無かったんだろ。……言つとくけど、

こんな、前例ないんだから。

沢井 法廷内で懲役刑になった被告人に、回し蹴り食らわせた被害者遺族いますよ……。

谷 死刑判決の場で起こったことはない。そんなの、する意味なんてまるでないんだから。

小山 沢井先生は言っていました。死刑を肯定するのなら、それは人殺しも肯定することに

なる。それはどちらも人を殺す行為なのだから。その反対に殺人を許せないのなら死刑

も許せないことになる。この二つは同時に否定されたり肯定されたりするものだって。

谷 ……ナイフは、偶然持ってたのか。

小山 主文後回しが告げられると、法廷は歓喜に包まれました。テレビで見るドラマなんかよりも、ずっとそれはドラマっぽいです。……たくさんの記者が走って行きました。谷 ふとポケットに手を当てたら入った。指を切ったからあわてて取り出したならわかるよ。危ないから。……でも、持ったままナガイに近寄ったのは何故だ。話がしたかっただけなんだから。刺しに向かったんじゃないやなくて。彼と、何もかも。

小山 ナガイワタルは黙ったまま立ち尽くしていました。……歓喜の中。沢井先生が一人、傍聴席から前に出て来ました。不意を衝かれるというのはああいふことだと思いました。……咄嗟のことでみんなは理解ができず、先生が柵を乗り越えた辺りで、やつと、これはおかしいと思いました。先生の手にはナイフが握られ、誰かの悲鳴が聞こえました。元奥さんの声だったと思います。

谷 言ってたな。間接的な自殺として彼の願いを成就させることは避けたいって……。

小山 沢井先生は、ナガイワタルに誰よりも近づくと、彼を見つめ。……抱きしめました。……ナイフは手から零れ落ちました。

谷 ……黙ってる。いいな。すぐ出してやるから。

小山 たくさんの人が、二人に詰め寄り、彼から先生を引き離すと、先生は泣いていたのが判りました。……あれは、誰のための何の涙だったんでしょう。……ナガイワタルは、終始、黙って立ち尽くしていました。

川上 そうだったんですか。

小山 神田さんは、もうこちらには。

川上 用件があれば、伝えますよ。

谷 即日控訴したかったが取り下げることになった。弁護団の総意でね。残念な話だよ。

沢井 ……。

谷 和也君の命が、死刑問題に一石を投じるということにはならなかったよ。……君が望んでいたことだよな。残念ながら。不可能だったよ。

沢井 いいですよ。

谷 すまない。

沢井 ……。

谷 ……すまない。

沢井 ……いいんですって。

谷 お前が持っていたナイフ。どうなったと思う。それが揉みくちやになった時、消えたらしくて。今、必死になって探しまわってる。俺もしつこく聞かれたけど。持っていないよ。……ほんと、どうなっちゃったんだろね。

沢井 ……谷さん。俺、殺せなかったよ。簡単なものじゃないんだね。人はね。人を殺せる生き物じゃないんだ。

谷 余計なことと言うな。すぐ出してやるから。

沢井 ……殺せる人、いるね。その人はね、心の底から、悲しいんじゃないかな。押し通せるくらい暗いんだよ。それはね、とても悲しい目をしてるんだよ。

谷 誰を弁護してるつもりだ。

沢井 それがわかった。それだけでね。……充分ですよ。

谷 黙ってる。いいから……。

神田、外のエリアで手記を手にして。

神田 夫は、息子の命が失われたことに何の意味も見いだせないと嘆きました。言葉が悪いかもしれませんが、犬死にしたのだと思いたくなかったのでしょうか。……夫とは次第に距離を感じるようになりました。……あの人は、果てしなく広い砂漠へ旅立ったかのようにです。息子の生きた証、そのたった一粒の種を握りしめ、ただ一人、砂と風との広大な広がりの中へ、一つの境界印を刻むために旅立ったのです。……私は主人とは違う道を選択しました。子供を亡くした気持ちは同じですが砂漠の中では地図も道しるべも、まるで見え方が違うのです。

街の声 1 ナガイワタルに対する死刑判決の報道は、人権派弁護士の限界、法廷での大失態という見出しで報道された。……沢井の取った行動は、批判的に受け止められ、誰にも理解されはしなかった。

街の声 2 ナガイワタルは獄中に姿を消す。再び彼がマスコミを賑わせることがあるのだろうか。大衆が期待した予言なるものも語られることはなくなった。

7

店の中には川上、荒木、志穂。私服姿の神田。

神田 散ったね、桜。芽吹いたね。

荒木 そろそろ第二弾、出しますか。

神田 解散で暴露本？ ありえないよ。

川上 行かないんだ。携帯の圏外まで。

神田 逃げない。過ごすよ、子供たちと一緒に。桜が咲いて送り出して、また入ってきてその繰り返し。あの子はみんなにお願いして一緒に卒業させたんだ。でも、私が卒業できてない。……しなくっちゃ。ありきたりな理由ですが私にはとても大切。

川上 お疲れさま。

神田 もうホーム・ページしないの？ ジャーナリストなのか修道女なのか、わけわからん活動もしないの？

川上 クレーム怖いよ。特にあなたみたいな輩から。

神田 わたしだけじゃなかったでしょ。

川上 あなたがいちばんしつこかったよ。閉鎖しても手紙で何通も。今どきいないよ、アナログで責めてくるのは。

谷、入ってくる。

川上 ……どうも。

谷 どうも。(神田に) これまた、どういう(用件で。

神田 直接会ってじゃないと。どうも。

谷 沢井君は不起訴でしたよ。

神田 (うなずき) ……これを、渡したくつて。(と、ナイフの入った包みを出しテーブルにコトリと置く)

谷 (包みを開け) ……ああ。あなたでしたか。

神田 ……見覚えあったものだから。……思わず拾って。善意じゃありませんよ。持っていてもアレだし。返してもどうよってことですが。勝手に処分することもできなくて。谷 そうですか。

神田 美談じゃないです。また裏切られました。あんな気持ちになったことはありません。

谷 あなたは見てましたね。

神田 呆れました。泣きましたよ。……でも、あれは呆れ涙ですよ。何やってんのって。谷 呆れ涙ですか。

神田 沢山の人から訊かれました。まるである答えを導きだそうとしている質問を。被害者は刺すべきだ、仇討ちがあってもいいんじゃないかって。……皆は口実を見つけて正義に立ちたいだけ。……自分の立っている場所が初めてわかりました。周りの人、助けしてくれる人たちは、救ってくれようとしているんじゃないかって、ナガイ共々、崖の下に突き落としていたのよ。鬼や牛の角をつけさせて、崖の上からそこにいるべきだって、私たちをずっと見下ろしていたのよ。

荒木 そんなつもりじゃ。

神田 (荒木に) あなたもそうよ。(谷に) あなたも。(川上に) あなたもそうなんだから。

谷 あんまりじゃないですか？

神田 恨んでなんかいない、人はそういうもの。痛みは本人だけのもの。でも断絶を越えようと差し伸べてくれる手、それは大切、例え誤解を受けてもね。

谷 沢井君は、彼と一緒に突き落とされていることを自覚していましたよ。

神田 どうしてあなたにわかるのよ。

谷 ……。

神田 (ナイフを手に取り) これ、あなたが持っていて下さい。

谷 ……はい。いいですよ。

神田 このナイフは私とあの人の角です。零れ落ちた角です。

谷 ええ。

神田 あの男は生きていくんでしょ。限られた時間の中でその命を生きてく訳なんですよ。谷 はい。

神田 (ナイフをテーブルに置き) なんなら、ガンジス川に捨てちゃって下さいね。

谷 ……ガンジス川ですか。

神田 (ガンジス川を眺め) ええ。何もかも捨て去るところですから……。(去ろうとする)

松本、入ってくる。

松本 ……もうお帰りです。

神田 また来るね、マスター。気が向いたらだけど。

松本 ええ。ごきげんよう。

川上 さよなら。

神田 ……じゃあね。

神田、店から去る。

荒木 (松本に) お出かけでしたか。

松本 あまりにも気になってしまつて。……神々が橋の下に大勢、放り出されている。

谷 ああ、サドウーですか。

荒木 サドウー。なんですか、それ。

谷 浮いたりするんだよ、ふわって。

荒木 なんですか、ふわってって。

谷 沢井君が言つてたよ。身をもつてして、この世の矛盾を占っているんだ。

荒木 わけがわからない。

谷 ……じゃあ、俺も失礼するわ。

谷、去る。

松本 町を離れて澄んだ水の近くに住もうと思つてました。自然とそうなるんじゃないか

つて。年を重ねるとどこまでも気持ちが高くなっていく、そんな気がして。でも実際

そんな都合のいいことは起こらない。彼にガンジス川って言われ腑に落ちましたね。天

に近づくごとに気高くなるというのは慰めだ。生きてる限りわたしは濁った川だ。

川上 ……マスター。わたしもそろそろ。

松本 寂しくなりますね。

川上 手紙を書くかも。

松本 沢井さんの思いに感化されたとか。

川上 また始めようかと思つて。

松本 わたし宛じゃありませんよね。

川上 ご存知ですか。彼のこと。

松本 ……シホちゃん。出前、下げにいつてくれる。

荒木 ウチだったらいよいよ。

志穂 いいよ、いくよ。

志穂、荒木、去る。

松本 今じゃ、あれですね。手続きさえすれば支援者は確定囚に面会が出来るようですね。

川上 世情には疎いんじゃないの？

松本 (窓の外を眺め)……寝たつきりになってしまった確定囚がいました。盲目で、最

後は押し黙り、とうとう動けなくなった人がいました。

川上 ええ。

松本 この辺り一面に雪が降つたとき、楽しそうに話をしてくれましてね。

川上 口を利けた頃の話ですか。

松本 雪の降る中、この街の空を飛んだのですよ。領事館や美術館にも雪が積もっていて、とても綺麗でしたよって。

川上 飛べたんだ。じゃ、戻ってこなくても。

松本 二〇〇三年にアメリカとの間で最終戦争が起こります。彼らは日本にも再び原爆を落とします。これは予言ではありません。本当に見に行ったら焼け野原に立ちすくんでいた人がいて事情をきいて来ました。

川上 大はずれですよ。今、何年ですか。

松本 九月一日に大地震がきます。刑務官さん、逃げて下さい。皆にも伝えて下さいって。

川上 適当ですね。何にも当たってないじゃないですか。

松本 信じる人もいましたよ。断絶された中、矛盾の中でも幸せを探し求めました。……違うものを見て暮らせる生き方もありますよ。見えるものそのままじゃなく、少しぐらい間違っただけでも幸せに。

川上 ……。

松本 街には夢がある。でも蔓延する幻想を捨てて、どうして辛い現実へ逃げてしまう人がいるんでしょう。死ぬために、どうして厳しい実感を求める人がいるんでしょう。

川上 私には、判りません。

松本 (胸が詰まる) 判るときが来るんですかね……。

ガングス川のせせらぎが沈黙を静かに包み込む。

川の主が遠くではねた。

了